

柏	若菜下	若菜上	藤裏葉	梅枝	真木柱	藤袴	行幸	野分	篝火	常夏	螢	胡蝶
.....
198	177	149	124	112	86	73	59	52	48	40	28	5

横	笛	209
鈴	虫	217
夕	霧	224
御	法	255
幻		272
雲	隠	272
主な参考文献		303

胡

蝶

こちよう

風吹けば浪の花さへ色見えてこや名に立てる山吹の崎

風が吹くと風に騒立つ波までが、山吹が咲いたように黄金色に見えて、これがまあ、あの有名な山吹の崎なのですねえ。

「浪の花」は、白く碎ける波の秀を花に喩えていう。「こや」は、代名詞「こ」に、感動の間投助詞「や」のついたもので、これがまあこの意。「山吹の崎」は、山吹の名所で、歌枕である。

源氏は六条院造営の際に、院を東南・西南・東北・西北の四つに区切り、それぞれ、紫上・秋好中宮・花散里・明石君の住居と定めた。各御殿は、住む人にふさわしく、春・秋・夏・冬の趣ある風情に造ってある。

さて、胡蝶の巻は、「三月やよひの二十日あまりの頃ほひ」と書き出される。六条院が完成したのは昨秋であるから、源氏や紫上がこの御殿で春を迎えるのはこれが初めてである。季は晩春とき。よそではとうに盛りを過ぎた桜が、ここでは今もお咲き満ち、柳は緑を増し、渡殿わたどののめぐりの藤も色あざやかにほころび始める。なかでも山吹はこのほか見事で、岸からこぼれんばかりに咲き、美しく

野分のわき

大方に萩の葉過ぐる風の音おとも憂き身一つにしむ心地して

秋になれば、ごく普通に萩の葉を吹き過ぎる風の音も、辛い我が身にとってはしみじみと悲しく思われる。

「大方」は、世間一般、ごく普通にの意。「萩の葉」は、明石君の、「風」は、源氏の喩である。

秋も次第に深まり、六条院の秋好中宮の御前では、春の御殿をしのぐばかりに秋の草花が咲き乱れて美しい。そのころ、例年になく激しい野分が吹き荒れて六条院も襲われる。初音の巻で源氏が語った六条院の様子が、この巻では、風見舞いをする夕霧の目を通して語られていく。

まず、夕霧は南の御殿を見舞った。源氏は明石姫君の部屋に行つて不在で、夕霧は東の渡殿の衝立て越しに、風のためであらう、開いていた妻戸の隙間からふと紫上をかいま見る。その姿は「春の曙の霞の間より、面白き樺桜の咲乱れた」ように美しい。その夜は大宮の邸に泊つたものの、夕霧の脳裏に紫上の面影が焼きついて離れず、以来、夕霧の心の奥底に紫上への思慕が秘められる。翌朝、花散里を見舞い、ふたたび春の御殿に赴いた夕霧を、源氏は風見舞いの代行として秋好中宮

のもとに遣わした。秋の御殿はさすがに気高く優艶で、夕霧の気持ちも自然に引き締まるのであった。復命を受けた源氏は、夕霧を供にして自ら中宮の御殿を見舞い、ついで北の御殿の明石君を訪れるが、ちよつと風の見舞いを言つただけで立ち去る。

掲出歌は、そのときの明石君独白の歌である。後撰集巻五秋 読人しらずの、「いとどしく物思おもふやどの萩の葉に秋と告げつる風のわびしさ」を踏まえる。本歌の「秋」には、「飽き」が掛けられてあり、本歌の心情を自らの思いと重ね、気持ちを率直に歌にした。源氏の来る気配に、小桂こうちきを着て謙讓の意を表わす明石君の心得は見事であるが、歌には身分をわきまえて生きねばならぬ者の哀しみが底こもる。

この明石君にかかわる夕霧の描写はない。源氏の滞在時間が短かつたせいもあるが、夕霧には女の外的要因、すなわち、身分や容貌が価値判断の根拠となつていたのであろう。後の条に、明石姫君を訪れた夕霧が、私信のための料紙を請うたところ女房は姫の料紙を差し出し、夕霧は躊躇しながらも、「北のおとどの覚えを思ふに、すこしなめなる心地して」それを用いる場面がある。母親の出自を思えば、姫の料紙であっても使つてよいと判断したのである。軽く、見下した考えであるが、それが明石君に対する世間の評価であり、明石君の身分であつた。夕霧にとつて明石君は関心の対象外であつたといえようか。

また、地味な花散里に対しては、「いかで東の御方、さる物のかずにて立ち並び給ひつらむ、たとしへなかりけりや、あないとほし」(どうして花散里の御方が、源氏の妻の一人として肩を並べて